

同時通訳の SL/TL の差異から探る概念的処理の実態

石塚 浩之

(神戸市外国語大学外国語学研究科博士課程)

By examining superficial differences between SL and TL, we can explore cognitive processing of simultaneous interpreting. In some cases, apparently noncorresponding expressions in TL preserve the message the original speaker intends to convey. Thus, superficial linguistic differences are not always just accidental errors or failed attempts of an interpreter, but show essential cognitive processes of utterance comprehension and enable stable and efficient performance of interpreting. In this paper, we will examine characteristic examples taken from a record of genuine simultaneous interpreting and analyse them in terms of vocabulary, word selection, textual cohesion and syntactic structures in SL/TL in order to probe mental processes bridging SL and TL. We will examine conditions of “deverbalisation” and “conceptualisation” in context and show how they work in simultaneous interpreting and general discourse processing.

1. 序

同時通訳作業の分析にあたり、通訳者の内部で行われる言語処理過程の実態を直接観察することはできない。しかし入力される起点言語(SL)と出力される目標言語(TL)の関係から、その処理過程を探ることは可能である。同時通訳の事例を検証すると、SLとTLの間に顕著な表面的差異が認められるにもかかわらず、訳出に際して伝達内容の劣化は認められず、むしろ通訳としては成功している事例を発見することができる。通訳者は、SLで意図された伝達内容を解釈し、等価性の期待される内容を、TLにおいて可能な限りの即時性のもとに再構築する。熟練した通訳者の訳出に現れるこうした差異の多くは、偶然や失敗の産物、あるいは単純な訳出のゆらぎではなく、同時通訳作業の本質からもたらされる通訳者の認識の反映であると考えられる。

発話の認知的処理過程には、音声刺激の受容による音声表示の形成から、統語表示、意味表示の形成、認知的文脈の形成を経てディスコース処理にいたる段階がある。音

ISHIZUKA Hiroyuki, “An Examination of Conceptualization in Simultaneous Interpreting Based on the Differences between SL and TL.” *Interpreting and Translation Studies*, No.8, 2008. pages 19-36.

声刺激を言語処理過程の最も上位にある表層とすると、その対極に物理的言語現象から離れた認知処理の深層を想定することができる。SL と TL の間の差異は、入力から出力にいたる諸段階のそれぞれに起因する可能性があるが、本稿では特に深層での過程を経たディスコース処理を示す事例に着目し、その実態を考察する。

2. 資料について

分析に使用した資料は、2005年7月8日のブレア英首相(当時)のスピーチとその通訳事例(放映:NHK BS-1「きょうの世界」)であり、SL、TLの記録データは、書きおこし原稿として『同時通訳における概念化過程の検証 平成17-19年度科学研究費補助金研究成果報告書(課題番号17520272)』に収録されている。(資料番号R-6)この報告書には、発話理解研究の生データとして同時通訳記録を使用する場合の注意点として、(a)原稿や予行のないぶっつけ本番の同時通訳であること、(b)通訳者の能力を把握せねばならないこと、(c)標準的な同時通訳を採用すること、(d)訳出の正当な評価の確保に努めること、の4点が挙げられている。(a)、(b)、(c)はオンラインの発話処理研究を目的としたデータの品質と信頼性に関わるものであり、(d)はデータ分析の質の確保に関わるものである。本稿で使用した通訳事例は、この報告書に収録されており、通訳形態、通訳者の能力、訳出の品質のいずれにおいても本稿の目的に十分なものを採用した。

使用したデータのもととなった放送は、アフリカ援助、気候変動対策を議題とした英国グレンイーグルス G8 サミット終了直後の記者会見でのスピーチであり、通訳は生放送への同時通訳として行われた。通訳者は、事前情報として、サミットの背景、目的、議題、参加者、その他の時事的一般知識を保有していたが、スピーチの原稿などは持っておらず、その具体的内容についても知らされていなかったと考えられる。なおここでは当日の通訳者の名前は挙げないが、経験、実績とも十分な通訳者であったことは確認済みである。

3. 特徴事例の分析

以下に具体的な通訳事例の分析から、SL の入力から TL の出力に至る処理過程を検証する。(注¹⁾)

E 0 1 succeeding in resolving this issue. What I wanted to do therefore

J 0 1 ば、私たち、この問題を解決することなどとうてい出来ません。

E 0 2 at this summit was establish the following, and I believe we

J 0 2 ですから私たち、このサミットで目指したことは、次のような

E 0 3 have done this. I wanted an agreement

J 0 3 ことであります。私たちはこの成果をあげることが出来たと思います。

- E 04 that this was indeed a problem, that climate change is a
 J 04 まず私としては、 え、これが本当に問題であるということ
- E 05 problem, that human activity is contributing
 J 05 を認識したいと思いました。気候変動が問題であると、
- E 06 to it, and that we have to tackle it;
 J 06 え、そして人間の活動がその原因であると、 え、そして
- E 07 secondly, that we have to tackle it
 J 07 我々これに対応しなくてはいけないという合意を達成しようと
- E 08 with urgency; thirdly,
 J 08 思いました。そしてまたこれは急務であるということの認識も必要でし
- E 09 that in order to do that we have to slow down, stop
 J 09 た。3番目。 それをするためには 私たちは、
- E 10 and then in time reverse the rising greenhouse gas emissions;
 J 10 この、排出量の増加を抑え、そして最終的にはそれを削減しなくては
- E 11 and finally, we have to
 J 11 いけないということ、これを合意したいと思いました。そして最後に
- E 12 put in place a pathway to a new dialogue
 J 12 なりますけれども私たちは この新たな対話
- E 13 when Kyoto expires in 2012.
 J 13 のために道筋を

資料のこの箇所、ブレア首相は、グレンイーグルス G8 サミットの終了にあたり、会議の開催前、主催国首相として自らが期待していた事項について述べている。ここではまず E03 に出現する agreement に対する訳出語彙に注目する。

この agreement は、文の目的語の位置にあり、後続する 6 箇所の that 節がその内容を具体化している。SL における agreement という語の出現は 1 度のみであるが、TL においては対応する訳出が 4 箇所に見られ、それぞれ「認識」(J05)、「合意」(J07)、「認

識」(J08)、「合意」(J11)という 2 種類の訳語があてられている。同一の指示内容を持ち、同一の機能を果たす 6 箇所の *that* のうち、残りの 2 箇所は *agreement* に対応する訳語は使用せずに処理している。この訳出のゆらぎは *agreement* の辞書的語意の多義性によるものではない。本稿では、このゆらぎを規範的観点から問題にするのではなく、通訳者の行う認知処理の反映とみなし、こうした現象を可能とする条件について考察する。

3-1. 結束性と文構造

ここで *agreement* の内容を具体化する *that* 節は、6 箇所で出現し並列している。「認識」、「合意」は *that* によって指定される対象が置かれるべきスロットを満たすための訳出語彙であるが、もしも通訳者がこのスロットを *agreement* の対応語で満たす方針を採用し実行したのであれば、その訳出語も 6 箇所に出現することになる。SL と TL の時間的対応関係を観察すると、最初の *that* 節を「認識したいと思いました」(J05)と訳出しながら、通訳者は 2 番目の *that* 節を聞いており、この *that* 節を訳出しながら、3 番目の *that* 節を聞いている。この段階で通訳者は *agreement* を具体化するための複数の *that* 節が並列する構造に気づき、*that* 節によって指定されるスロットのすべてに訳語をあてる方針を放棄したことが観察される。そのため 2 番目、3 番目の *that* 節は、それぞれ「気候変動が問題であると」(J05)、「そして人間の活動がその原因であると」(J06)と、スロットを空白のまま放置する形で訳出している。4 番目の *that* 節は、空白のスロットを放置せず、「という合意を達成しようと思いました」(J07)と訳出し、*agreement* には「合意」という訳語をあてている。さらに 5 番目、6 番目の *that* 節もスロットを放置せず、それぞれ「認識」、「合意」という訳語をあてて処理している。

表 1 6 箇所の *that* と *agreement* の訳出語彙

	SL 対応位置	TL 対応位置	訳出語彙
<i>that</i> (1)	E04	J05	「認識」
<i>that</i> (2)	E04	J05	φ
<i>that</i> (3)	E05	J06	φ
<i>that</i> (4)	E06	J07	「合意」
<i>that</i> (5)	E07	J08	「認識」
<i>that</i> (6)	E09	J11	「合意」

ここでの *that* の処理は、表 1 でまとめたとおり *agreement* に対応する訳出語彙により 3 種類に分類される。すなわち、(a)「認識」という表現を使用した訳出、(b)「合意」という表現を使用した訳出、(c)訳語を使用せず空白のスロットを放置する処理である。この 6 箇所の *that* の処理において、いずれの場合も通訳者は E03 で出現した *agreement*

に対応する概念を保持しつつ訳出を行っている。この心的保持は、少なくとも J11 まででは継続していることになる。

Halliday and Hasan (1976)は、複数の文の集合に全体としてのまとまりを与え、テキストとして成立させる言語的特徴として、結束性の概念を掲げる。結束性とは、テキスト内部の要素間の意味的諸関係として定義され、指示、代用、省略、接続および語彙的結束性に分類される。このうち、指示、代用、省略は文法的に形成される結束性であり、語彙的な結束性とは異なる性質を持つ範疇にまとめられる。接続は、文法的結束性と語彙的結束性の両面的な性質を持つ。

E04 で出現し、J05 において「認識」と訳出された最初の *that* は、*agreement* の直後に置かれているため、構造的に *agreement* の内容を具体化するための同格関係を表す接続詞と判断される。2 番目の *that* は E04 で出現し、J05 において空白のスロットを放置する形で処理された。ここで 2 番目の *that* が最初の *that* と同じ役割を果たしていると判断されたのは、同格の対象となる *agreement* が *that* の直前で省略されており、この省略が最初の *that* との並列関係を類推させ、結束性を生み出していることによる。Halliday and Hasan (ibid.)によると、省略とは空白による指示であり、ここでの空白のスロットを放置する訳出は、SL の構造の再現という点でも、結束性の再現という点でも、妥当であることがわかる。以下、3 番目以降の *that* でも同様に並列関係の類推が行われている。

SL において 1 度しか使用されていない *agreement* に対し、6 回におよぶ訳出処理が行われていることは、6 箇所の *that* の並列がテキストの結束性に貢献しており、この結束性が *agreement* の対応概念の心的保持の動機となっていると説明できる。しかしこのまったく同一の指示内容と文法機能を持つ *that* に対して 3 種類の異なる訳出処理が可能である事情を、この結束性のみから説明することはできず、なんらかの追加的な機構を想定する必要がある。

3-2. 品詞と文法関係

SL のこの *agreement* は名詞であり、*want* に対する目的語として機能している。この語に対応する訳語のあてられている 4 箇所の *that* の処理事例では、「認識」、「合意」という語彙がそれぞれ 2 回ずつ選択されている。ここでは TL におけるこれらの語彙の使用状況について、さらに詳細に検討する。

最初の *that* (E04)に対する処理は、「認識したいと思いました」(J05)となっており、「認識」はスル動詞の一部となっている。TL のこの文全体の述語は「と思いました」であるが、その内容を示す従属節内部においては「認識したい」が述語の役割を担っており、対応語である SL の *agreement* とは異なる役割を担っている。4 番目の *that* (E06)は「合意を達成しようと思いました」(J07)と訳出され、「合意」は「達成し」に対する目的語となっている^(注2)。5 番目の *that* (E07)は、「認識も必要でした」(J08)と訳出され、「認識」は「必要でした」に対する主語となり、主題を提示している。最後の *that* (E09)は「合意

したいと思いました」(J11)と訳出され、この「合意」は再びスル動詞の構成要素となっており、最初の that と類似の処理がなされている。

表2 6箇所 of that と agreement の訳出処理

	訳出語彙	品詞	文法関係
agreement		名詞	目的語
that (1)	「認識」	スル動詞の一部	述語
that (2)	φ		
that (3)	φ		
that (4)	「合意」	名詞	目的語
that (5)	「認識」	名詞	主語
that (6)	「合意」	スル動詞の一部	述語

この agreement は、6箇所の that によって指定されるスロットを充足するために使用される共通要素ではあるが、それが that の処理のために活用される際、SL での品詞と文法関係は保存されていない。語彙項目のみに注目した場合、3種類の処理方法がとられていると判断された事例が、品詞と文法関係を考慮するとさらなる多様性を孕んでいたことがわかる。同一の文脈にあらわれた6箇所の that は、すべて同じ対象を指し、同じ機能を持っているにもかかわらず、同一の通訳者が、その都度、異なる語彙項目、品詞、文法関係を用いて訳出作業を行っているのである。ここまで agreement の扱いに焦点をおき分析を進めてきたが、wanted (E03) まで含んで観察すると、その訳出処理の多様性はさらに際立つ。このことは、このディスコースを処理するにあたり、通訳者は agreement に対応する概念を保持してはいるが、それを TL と結びつけた言語表示として保持しているのではないことを示している。

そもそも SL において2番目以降の that では先行する名詞は省略されている。SL の統語構造を TL に忠実に反映するためにはスロットを空白のまま放置せねばならず、2番目と3番目の that ではそうした処理がなされているが、それ以外では SL と TL の間の差異が生じていることになる。通訳者が同一表現の繰り返しによる訳出の単調さを嫌い、ある程度、意識的に TL に変化を持たせているという可能性はある。また実際の通訳事例において、品詞や文法関係の変換が生じることは珍しいことではない。では通訳者は、こうした処理の際、SL と結びつけた言語表示を保持し、訳出が必要となるたびに、異なる文法構造への変換作業を行い、異なる語彙を選択しているのだろうか。それよりは効率的な認知処理機構を想定することが可能ではないか。

3-3. 処理方法の選択と訳出順序

agreement という語に対し「認識」という訳語の選択は一般的ではない。この訳語は

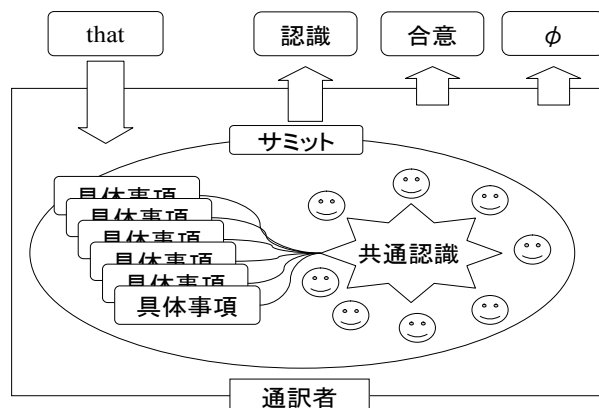
agreement のもつ多義性の範疇にはなく、多義語の一義化によって入手できない。にもかかわらず J05 および J08 の「認識」は、TL のディスコースにおいて違和感を引き起こすことなく、SL で意図された伝達内容を十分に再現している。この訳出処理が可能となるためには、ここでの「認識」の主体が「サミットの参加者全員」であることが文脈的に含意されており、「認識する」という表現の実質的内容として「共通認識に達する」というアドホックな意味が形成されていなければならない。その前提としてさらに、通訳者が「サミット(summit)」について「主要国の代表者が一堂に会し、特定の議題について参加者全員の共通認識に到達する場」という概念を保有していることが必要である。この概念はサミットに関する一般的な理解や背景知識に準拠しているため、ここから形成されたアドホックな意味は、通常理解力を備えた日本語の話者であれば、十分に理解することができる。

直前のテキストを観察すると、E01 において What I wanted to do therefore at this summit was establish the following という発話がなされ、通訳者が J02 において「ですから私たち、このサミットで目指したことは、次のようなこととあります」と訳出したことにより、通訳者には、この直後の SL においてはサミットの成果について述べられるはずだという理解があったと考えられる。この SL、TL のそれぞれによって形成された文脈と、その文脈のもとで形成されたサミットに関する概念が、上で見たアドホックな意味の源泉をなしている。

一方、J07 と J11 での「合意」という訳語に関しては、訳出に際して上記と同様の理解過程があったとしても、少なくとも訳語の検索に際しては、通常の辞書的対応語彙の探索で十分であり、より表層に近い操作で足りる。

図 1 は、サミット(summit)に関する通訳者の概念形成と訳出の関係を表している。通訳者は、このディスコースを処理するにあたり、サミットに関する概念を形成し、E03 の agreement に対応する概念をサミットの形成概念の一部として保持している。そして SL から 6 箇所 of that が入力されると、that と agreement とのつながりを認識することによって、それぞれの that に後続する内容が今回のサミット参加者が到達した共通認識の具体事項であることを理解し、訳出を行っている。

図 1 通訳者の概念形成と訳出



これらの *that* を処理するにあたり、通訳者は *agreement* に対する訳語として J05 で「認識」という表現を採用したあと、J07 で「合意」という代替表現を使用する。さらに J08 で「認識」、J11 で「合意」という訳語を採用している。仮に通訳者が J05 の「認識」という語彙に対し不適切さを感じ、J07 では「合意」を選んだのだとすれば、J08 で「認識」という訳語に戻る理由はない。通訳者は、より表層に近い訳語とより深い層での訳語の双方を *agreement* に対する訳語として適切と判断しているようである。TL での使用例を見る限り、「認識」と「合意」のふたつの訳語の使い分けにはさしたる動機があるように見受けられない。ここからも通訳者がこの訳出処理のために TL に結びついた表示を保持しているわけではないことが確認できる。

この概念の形成には、SL および TL から形成された文脈情報だけではなく、通訳者内部にあったさまざまな既存情報が必要であり、その性質上、言語的形態で保持されていると考えることは難しい。これは Funayama(2007, 2008)の提唱する概念的複合体に相当すると思われるが、そうだとすればこの概念は SL から TL からも離れた非言語的形態をとり、ディスコース解釈のために活用されていることになる。以下では、この形成概念の実態について詳細に考察する。

3-4. 心的保持の内容と形態

この訳出とそれに伴うディスコース処理を可能とする心的過程についてさらに具体的に考察すると、通訳者は少なくとも以下の内容の心的保持が必要である。

- a. 政治家の演説に関する一般知識
- b. サミット一般に関する背景知識
- c. 今回のサミットに関する背景知識
- d. SL を源泉として形成された文脈
- e. TL を源泉として形成された文脈
- f. *agreement* によって示される「共通認識」
- g. *that* 節によって示される「具体事項」
- h. その時点で処理すべき SL の言語表示
- i. その時点で処理すべき TL の言語表示

これらの保持内容は、想定される保持期間の長いものから短いものの順に並べている。政治家の演説に関する一般知識である a には、一般的な政治家の発言内容、話し方、語彙および表現が含まれる。ここから通訳者は、状況に適した言葉遣いなどの情報を得る。b は、サミット一般に関する背景知識であり、サミットの一般的な意義、目的が含まれる。a および b はこのときの通訳作業とは無関係にもともと通訳者の内部にあり、今後も継続して保持されると思われる内容である。c は、今回のサミットに関する時事的背景知識であり、参加者の顔ぶれとそれぞれの思惑、今回のサミット

の議題とその社会的背景、今回のサミットをめぐる社会状況や世界情勢などが含まれる。これは今回の通訳のために通訳者によって準備あるいは活性化された内容である。この3つは通訳作業の開始以前から保有されていた通訳者にとっての既存情報である。したがってこれらの情報源はテキストの外部にある。d、e、f、g、h、iは、通訳作業中のテキスト内部を、直接あるいは間接の情報源としている。d、e、f、gは進行中のディスコース処理のために保持されている内容である。dはSLを情報源とする心的文脈で、その一部はこのサミットの概念形成に関わる。eは通訳者自身の産出したTLを情報源とする心的文脈であり、dと同様、その一部がサミットの概念形成に関わる。fはこのサミットに関する概念の構成要素として、ここでの **agreement** の意味を含む。これは図1に示した「共通認識」に相当し、**agreement** の一般的意味とアドホックな意味の両方を含む。gは図1の「具体事項」にあたり、6箇所の **that** で示された情報を含む。h、iは、それぞれSLおよびTLの言語表示であり、通訳者がその時点で聞き、話そうとしている内容と表現に相当する。

これらの保持内容のうち、この文脈でのサミットに関する概念の形成に寄与している情報は、b、c、d、e、f、gであり、6箇所の **that** の処理に直接的に関与するのはf、g、h、iである。この状況をまとめたのが表3である。通訳者はここに挙げた以外の要素も心的に保持している可能性があるが、少なくともここに挙げた内容を保持せずにはSLのディスコースを処理し、TLへの産出を行うことはできない。

表3 心的保持内容とその役割

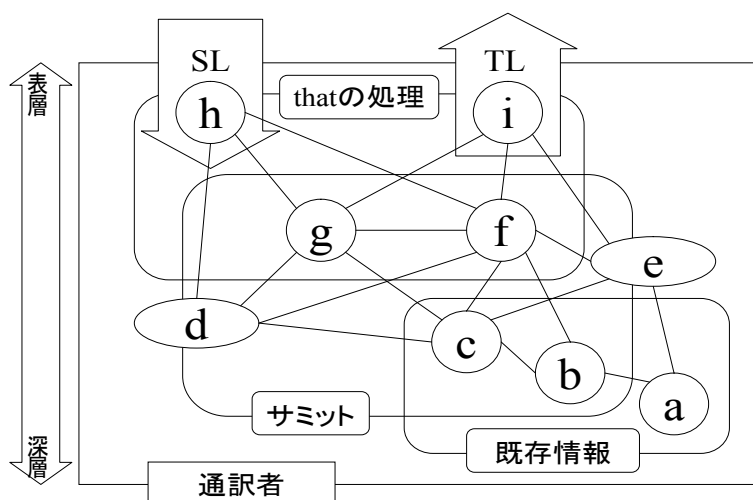
保持内容	情報の性格		情報源	サミット概念形成	that処理
a	既存情報	継続的背景情報	テキスト外		
b			テキスト外	○	
c		今回の背景情報	テキスト外	○	
d	ディスコース理解のための保持内容		テキスト内	○	
e			テキスト内	○	
f			テキスト内	○	○
g			テキスト内	○	○
h	訳出作業の素材と産出物		テキスト内		○
i			テキスト内		○

形成された概念は新情報hの入力により、継続的に展開していると考えられる。図2は、それぞれの保持内容と概念の展開を仮説的に図式化したものである。通訳者の認知機構を表す四角形の内部は、上辺に近づくほどその認知的処理が表層に近い場所

で進行していることを示し、下辺に近づくほど深層での進行を示している。図中の各要素を結ぶ直線は、概念の展開における各内容の情報の流れを表している。ここで表現したのは、各要素がそれぞれ多様な影響関係を持つということであり、結線は要素間のすべての関係を示したものであるのではない。

たとえば h の内容は、入力後、d、f、g の情報源となり、a、b、c の情報源ともなりえる。この関係は単方向であり、逆側の情報の流れはありえない。「共通認識」としての agreement の意味内容である f、that の指示する「具体事項」である g の形成には、h の他に a、b、c、d、e が寄与し、さらに f と g は相互に影響を与え合っているはずである。f および g に対する a、b、c、d の関係は双方向である。このように通訳者の心内にあるさまざまな保持内容は、相互に影響を与えつつ、概念を形成し展開している。こうして形成された概念の諸要素が直接、間接に関与し、i を通じて TL を産出していると考えられる。すなわち i の形成には、もともと通訳者の心内に存在した情報および SL、TL のそれぞれから得られた多様な情報によって形成された概念の働きが関わっている。i に向かう情報は、e との関係を除き、すべて単方向であるが、e を通じて他の要素に影響をもたらす可能性はある。こうした心的情報の相互関係は、概念のネットワーク構造を推測させるものでもある。

図 2 保持内容と概念の展開



ここでは、通訳者が訳出に使用する心的文脈の総体の形成には、その時点で訳出の対象となる SL の言語情報だけでなく、その時点までの SL および TL によって形成されたディスコースの他、既存知識、背景知識なども源泉となっていることが示されている。通訳者は SL から TL への訳出を行うにあたり、SL で使用されている語彙の辞書的意味や統語構造を TL に置き換えているだけではなく、さまざまな情報を源泉として構成された文脈を踏まえ、SL において意図されたディスコースを TL に再構築しようとしている。

人間の心内において、知識や情報は必ずしも言語ではなく、こうした保持内容のすべてが通訳者の心内で言語の形態をとるとは限らない。言語による記述可能性、言語による想起可能性、言語での保持形態は、それぞれ区別して考える必要がある。上記の a から h の保持内容の説明には言語を使用しており、通訳者はその保持内容を言語によって想起し記述することも可能であろうが、これはその情報の保持形態が言語であることを意味しない。非言語的な保持内容が、意識した瞬間に言語となる場合もありえる。仮にある内容が言語の形式で保持されているとすれば、それは何らかの言語的表示形態、すなわち音声表示、意味表示、統語表示のいずれかの形態をとることを意味するが、言語表示は心的情報の唯一の可能的形態ではない。

3-5. 心的保持の非言語的性格

発話の理解に脱言語化された概念の介在があるのかという問題は、通訳行為に限らず人間の言語コミュニケーション一般に関わる。通訳行為も人間の言語活動の一種であり、その過程の大きな部分は、人間の一般的な発話処理能力に負っている。Sperber and Wilson (1986/1995)は、人間の発話理解一般におけるコード化された言語情報以外の要素が果たす役割の大きさに着目し、文脈効果を生み出す関連性の原理に基づき生み出される表意および推意という概念を提示した。しかし人間の意図的伝達行為における非言語的要素を強調するこの理論において、表意および推意の内容は言語によって表現されており、その具体的な形態が言語表示の形をとるのか、あるいはそれ以外の概念的形態をとるのかについては、明確な見解は示されていない。

思考内容の具体的記述にあたり、言語が非常に効率的な道具であり、さらに言語は、概念を操作し、思考を展開させるための道具としても強力な有用性を持つ。そのため思考と言語は分かちがたく結びついているようにすら感じられるが、画家や作曲家の創作活動などの例を見れば、非言語的な思考形態が存在することは明らかである。これはなにも芸術家の特権ではなく、一般の人々の日常生活においても、空模様から天候の変化を推測したり、料理の匂いや色から食材の加熱の具合を判断したりする例など、容易に多くの例を見出すことができる。言語から独立した思考がありえる以上、言語から独立した概念も存在するはずである。

一般に発話理解とは、音声や文字などの物理的刺激の受容と、その刺激と既存の文脈との組み合わせに基づく新たな文脈形成をその本質とする。文脈は言語的要素のみで構成されているとは限らない。発話理解の実態を分析する際、直接的に観察可能なのは、そこで使用された音声言語あるいはそれを文字化した資料であり、心内過程を直接的に観察することはできない。

音声や文字などの物理的刺激は、人間の知覚機構を通過することで、音声表示、意味表示、統語表示となり、この過程を経ることで言語として認識される。つまり言語表示は認知的処理の産物であり、主観的要素を含んでいる。音声や文字などの物理的刺激は客観的に存在するが、それらを言語として認識するのは個別の主観の働きであ

る。音声言語にしても書記言語にしても、それらを言語として捉えた場合、入力刺激として観察対象となるのは純粋な物理的刺激ではない。発話処理の実態を観察する場合、われわれが観察するのは単なる音声刺激や文字ではなく、それらの物理的刺激が産出する言語表示を含んでおり、観察者と被観察者の処理するそれらの表示が共通の規則に基づいて成立していることを前提としている。ここに示されているのは、言語にはコード化された制度的側面があり、コードに基づいた処理には個人差は生じないという考え方である。コード処理が常に一義的に決定できる対応関係に基づく限り、音声刺激と文字を対象とした言語処理の観察は客観性を確保できる。

しかし、現実の発話はすべて文脈の中にあり、ディスコースの一部として理解される。そうした文脈を構成する情報のすべてが言語の形態をとっているわけではない。言語的刺激によって形成された表示は、ディスコース理解に必要なその他の言語的あるいは非言語的情報と結びついて発話理解を可能とする文脈を形成していると考えられる。だとすれば言語的認知と非言語的認知の間に境界線を引くことはできない。言語過程には認知が深く関わっており、言語的認知は、さまざまな感覚器官に基盤を置く認知活動との相互作用により成立している。また認知のあり方は言語刺激によって大きく影響を受ける。その結果、新たな言語的認知が産出される場合もあるし、されない場合もある。産出された言語的認知は、音声や文字の形をとり発話となる場合もあるし、心的活動にとどまる場合もある。実際の発話に近い部分でなされた認知過程を表層、言語的表示から離れた場所でなされる過程を深層とすると、ディスコース処理には、表層から深層にいたるさまざまな深度での心的活動が関わっているといえる。

上記の事例で、SLの **agreement** に対応する内容がディスコース処理のため相当期間にわたり保持されている様子を見た。この訳出が TL において「認識」、「合意」という2種類の異なる訳語でなされており、それぞれの訳語を入手するための処理には認知的な深度の差があることを示した。仮に通訳者が「合意」という訳語のみを使用したとすれば、この訳語の選択にはそれほど深い認知処理は必要としない。一方、「認識」という訳語を選択するためには、**agreement** の辞書的意味の活用のみでは不十分であり、サミットに関する複合概念を利用し、ここで使用された **agreement** のアドホックな意味を形成せねばならない。

図3 agreement(語形)を利用した訳出過程

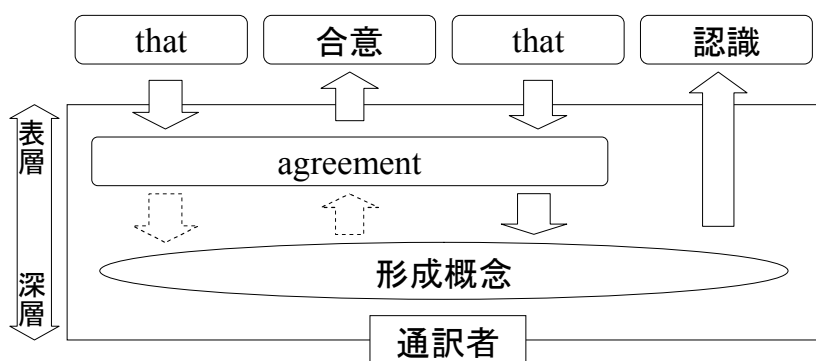


図 3 は、この文脈での **that** の訳出に際し、通訳者が SL の **agreement** を語形として保持し、それを利用している場合の訳出過程を示している。図中の形成概念は、図 1 で示したサミットの概念に近いが、**agreement** の一般的意味が保持された語形のみに含まれるとすれば、図 1 の概念とは完全には一致しない。この場合、「合意」という訳語を採用する際、必ずしも形成概念を利用しなくとも、この訳語を検索することは可能である。一方、「認識」という訳語を得る際には、保持している **agreement** の語形を経由して形成概念に到達し、この文脈での **agreement** のアドホックな意味を参照せねば、この訳語を入手することはできない。

図 4 agreement(語形)を利用しない訳出過程

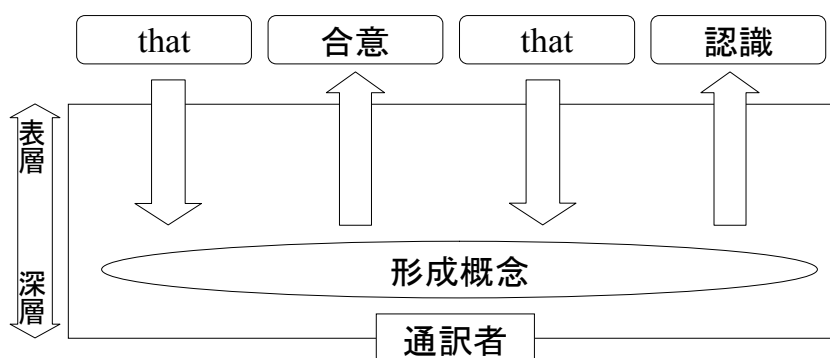


図 4 は、この文脈での **that** の処理に際し、通訳者が **agreement** の語形を経由せず、直接、**agreement** の意味を含むサミットに関する形成概念を利用する場合の訳出過程を示している。この場合、図中の形成概念は図 1 で示したサミットの形成概念に一致する。ここでは **agreement** という語彙の一般的意味のみではなく、この文脈において使用された **agreement** という表現の果たす役割も概念化されており、そこには表層レベルの語意とともに深層レベルでの解釈が含まれている。**agreement** の語形は消滅してしまうわけではなく、どこかに保持されており、必要に応じて想起される可能性もあるが、このディスコース処理では使用されない。この文脈での **agreement** の対応概念はすでに形成されており、直接、これを利用することになる。

たとえば「認識」を訳語として採用する場合の処理労力を検討してみる。図 4 の場合、**that** から直接、形成概念に到達できるのに対し、図 3 の場合はいったん **agreement** の語形を経ねば形成概念に到達できない。保持された語形の経由は認知的な迂回となり、直接的に概念に到達する場合よりも多くの処理労力を必要とする。「合意」を訳語として使用する場合は、形成概念を利用せず訳語を得ることもできるが、この事例では初出の「合意」(J07)よりも先に「認識」(J05)という訳語を獲得している。この段階ですでに形成概念への到達はなされているため、同じ深度への到達は初回ほどの労力を要しなはずであり、図 4 のほうが不利とはいえない。さらに図 3 の場合、矢印で表示されていない追加労力の要因として、**agreement** を語形として保持しディスコース処理と結

びつける必要があり、このための労力が必要とされる。全体としては、毎回 agreement を経由せねばならない図 3 の場合のほうが、直接的に形成概念に到達できる図 4 の場合よりも多くの処理労力を要するといえる。

より少ない労力でより大きな効果を引き出すという人間の認知の基本原則に則り、通訳者が SL の agreement という語形をそのまま保持していると考えよりは、通訳者が保持しているのはサミットに関する形成概念であり、その概念に直接到達することでディスコースを処理し、訳語の選択はその概念を基点としておこなわれていると考えたほうが、文脈処理に要する処理コストの適正化の観点から合理的である。さらに通訳者が SL からも TL からも離れた概念を利用して訳出を行っているとすれば、訳語の選択の問題だけではなく、3-2 で見た品詞と文法関係の変換を利用した訳出処理にも納得がいく。

ここでは特徴的事例として、脱言語化の実態を観察しやすい事例を見たが、ここで取り上げた事例が脱言語化による概念化を必要とする特殊な事例であるわけではない。多義性をはらんだ基本的語彙の一義化の場合にも、訳語の選定に際して同様の概念的処理が行われていると考えられるが、ここで取り上げた事例においては辞書的語意にはない訳語が使用されており、そのために概念的処理過程の実態をより明確なかたちで観察できる。この事例に基づき、通訳過程での脱言語化が自然かつ有用な現象として発生していると主張することは妥当と思われる。ここで重要なのは、発話処理のための心的中間過程がある段階で言語から完全に独立しているかどうかではなく、脱言語化された要因がいかに通訳作業の本質に関わっているかである。

SL と TL の間に差異の観察されない場合、SL から TL へ単なる辞書的置き換えに近い操作が行われている可能性もあるが、ほぼ自動化された用語や言い回しの置き換えなど訳出をのぞき、一般的に単純なコード変換だけで訳出が可能とは考えづらく、一見したところ表面的な差異が観察されない場合でも、通訳者の心内ではなんらかの文脈処理が行われているはずである。発話を解釈し、ディスコースを処理する際には絶えずさまざまな文脈を参照する必要があるし、文脈情報が多様な認知形態をとる以上、言語刺激を処理するための概念は常に言語的表示には収まらない要素があり、言語から離れた形で展開していると考えられる。

3-6. 非言語的概念の役割

こうした非言語的な概念は、オンラインでのディスコース処理の進行に伴い常に展開し、既存文脈に新情報を付加し、新たな文脈の形成に寄与していると考えられる。ディスコースの理解に際して、脱言語的概念は多面的な役割を果たしていると考えられるが、その全体像の俯瞰には別の研究が必要である。本稿では、ディスコース理解の一端として発生する文脈情報の拡充についての具体事例を 1 件確認するにとどめる。

Sperber and Wilson (1986/1995) の主張にしたがい、通訳過程で行われるディスコース理解を解釈すれば、SL より入力された情報は、通訳者の保持する既存文脈との組み合

わせにより新たな文脈を形成するが、その際、通訳者は最小の処理労力で最大の文脈効果が得られるよう概念レベルでの推論を行うと想定される。このとき SL からの入力情報に欠落が認められる場合、さまざまな源泉から形成された既存文脈をもとに情報の充足を行い、新たな文脈を形成する。

情報の欠落補充がテキストの先行部分にさかのぼってなされる場合、単なる情報の充足であるが、先取りして行われる場合は予測とみなされることになる。文脈の理解と概念形成という観点から見れば、このふたつの現象は本質的に同じ心的過程からなされるものであり、その違いは充足のなされる方向が時間軸に沿って逆方向に向かっていることのみである。だとすれば、予測を特殊な認知処理の一事例として取り上げるよりは、より一般的なディスコース処理の一部として捉えるほうが妥当性は高い。

たとえば E09 において現れた *to slow down, stop* という表現に対し、通訳者は J10 で「排出量の増加を抑え」という訳出を行っている。ここでは SL には対応要素の見当たらない「排出量」という訳語が TL において出現している。*slow down* という他動詞の目的語要素の推測の必要性(統語的知識)およびそれに伴う文脈理解(背景知識)の双方の過程が統合されることにより、「温室効果ガスの排出量規制」が文脈構成要素のひとつとなったと考えられる。実際、データの先行部分では、気候変動の話題が取り上げられており、SL の *Kyoto* に対し TL では「京都議定書」という訳語もあてられている。「排出量の増加」に相当する表現は、この訳出直後に出現する *the rising greenhouse gas emissions* に対応するよう見えるため、ここで通訳者は話者の発話を予測し、目的語に相当する情報を先取りしていると解釈が可能であるように思えるが、先行文脈によって形成された「気候変動」に関する概念に「京都議定書」および「排出量」の「増加」、「削減」、「規制」などの要素が含まれており、*slow down, stop* に共通する目的語のスロットが飽和によって充当されたと考えるほうが、認知的な処理過程としては妥当である。

同時通訳者の行う予測に関しては、通訳過程に固有の独立現象として捉えるよりも、一般的な発話理解の一部として捉え、SL からの入力情報をもとに形成された非言語的概念が、既存文脈と結びついて新文脈を産出する際、必要な情報の拡充を行ったと考えるほうが、通訳者のディスコース処理に際して必要とされる心的労力の想定量は少ない。

一般に通訳作業における予測は、こうしたディスコースレベルで保持された文脈構成要素が、SL からの入力情報とともに概念化される際、状況に応じて拡充され TL に表出し、拡充された内容がたまたま後続する SL にも出現する場合として説明できるのではないかと。予測したはずの内容が後続の SL で出現しなければ、この認知処理は予測とみなすことはできず、あるいは予測の失敗と判断される場合も起こりえるが、より一般的なディスコース理解という観点からは、拡充された内容が後続する SL で出現するかどうかはさほど重要なことではない。

SL からの情報入力から TL への出力までの情報保持は、とくに英日、日英の同時通

訳の場合、両言語の統語構造の違いにより強制された訳出遅延としての側面もあるが、この保持によってなされる脱言語化を伴う文脈把握こそが、大きく構造の異なる言語間での同時通訳作業を可能とさせる要因として作用しているとも考えられる。

4. 結語

本研究では同時通訳におけるディスコース処理の際に働く概念の実態について、実際の通訳事例をもとに検証した。取り上げた事例は、概念の非言語的実態を示すにあたり、特徴的ではあるが、取り立てて特殊なものではない。この事例では語彙項目に関するアドホックな意味の形成が観察されたため、概念形成の様子を考察しやすかったが、アドホックな意味形成が観察されないからといって、概念化が行われていないわけではない。ディスコースの処理には概念的な処理が常に重要な役割を果たしており、ディスコースの処理が必要とされる限り通訳者は常に脱言語化された概念を利用し訳出を行っていると考えられる。

単純な SL から TL へのコード変換と比較すると、こうした非言語的なディスコース処理過程は、通訳行為を複雑化しているように見えるが、発話解釈が費用対効果を最適化する認知原則に沿って処理される限り、SL の入力を最も心的負担の少ない形で処理し、TL へのより安定した出力を実現するための仕組みとなっているはずである。

ここに示した事例は、経験の乏しい通訳者のための熟練者による模範的訳語選択として示したものではない。同時通訳の場合、SL と TL を観察可能であることから、この過程で起こっている現象を間接的に観察可能ではあるが、このディスコース処理は、一般の発話理解と基本的な原理を共有するはずであり、通常、この発話理解の過程は意識されることなく自動的になされる。けれども、通訳経験の浅い通訳者や学生の訳出が SL から TL への表面的なコード変換にとらわれる傾向があることは、通訳の教育現場ではしばしば指摘される。大切なことは通訳過程の本質的部分にこうした概念化の働きがあり、それこそが個別の表現の的確さの源泉であることを具体的な事例から納得することである。

同時通訳者のディスコース処理と訳出の際に働く非言語的な概念の構造と機能について具体的な分析を進めることは、同時通訳の技能向上のための教育訓練の効率化だけでなく、人間の発話理解、ディスコース処理の一般機構の解明のために重要な役割を果たすことが期待される。

著者紹介：石塚浩之 (ISHIZUKA Hiroyuki) 英国バース大学通訳翻訳修士課程修了。日系メーカー国際事業部の企業内通訳・翻訳者を経て、現在、神戸市外国語大学外国語学研究科博士課程在籍。連絡先：mxh04173@nifty.com

【注】

(1) 印刷レイアウトの都合上、本稿へのデータ引用に当たり、SL および TL の改行位置を再編集し、新たに行番号を施した。本稿での行番号は 01 から始めているが、引用部分はスピーチの途中からであり、科研資料では 074 行目から 081 行目に相当する。なおデータの出典に習い、データの表記には可能な限り発話時間を再現しており、同じ行の同じ位置にある SL と TL の表現は同時点で発話された語の大まかな対応関係を表す。この対応に関しては、本稿へのデータ引用に際し、SL および TL の音声データをもとに再確認を行った。

(2) agreement に対する訳語という観点を離れ、語彙に含有される意味内容の範囲から agreement との対応関係を考えれば、「合意を達成し」までが agreement の内容と捉えることも可能であるが、いずれの場合も本稿の論旨には影響を与えない。

【参考文献】

- Chomsky, N. (2006). *Language and Mind, Third Edition*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Funayama, C. (2007). Enhancing Mental Process in Simultaneous Interpreting Training, *The Interpreter and Translator Trainer*, 1(1): 97-116.
- Funayama, C. (2008). Concept-based Representation of Simultaneous Interpreting. 『同時通訳における概念化過程の検証』平成 17-19 年度科学研究費補助金研究成果報告書 (課題番号 17520272)
- Gile, D. (1995). *Basic Concepts and Models for Interpreter and Translator Training*, Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Halliday, M.A.K. and Hasan, R (1976). *Cohesion in English*, London: Longman.
- Lederer, M. (1994). *Translation*, English Trans. Narché, N, 2003, Manchester: St. Jerome Publishing.
- Seleskovitch, D. (1968). *Interpreting for International Conference*, English Trans. Dailey, S. and McMillan, E. N., 1978/1998, Third Revised Edition, Washington, D.C.: Pen and Booth.
- Setton, R. (1999). *Simultaneous Interpretation – A Cognitive-Pragmatic Analysis*, Amsterdam: John Benjamins.
- Sperber, D. and Wilson, D. (1986/1995). *Relevance: Communication and Cognition*, Second Edition, Oxford: Blackwell.
- 船山仲他 (2000) 「同時通訳の認知的側面を構成する要素について」『同時通訳における情報フローの認知言語学的検証』平成 10-11 年度科学研究費補助金研究成果報告書 (課題番号 10610518)
- 船山仲他・笠原多恵子・西村友美 (2002) 「同時通訳における訳出遅延のメカニズム」『同時通訳における対訳遅延の認知言語学的研究』平成 12-13 年度科学研究費補助金研究成果報告書 (課題番号 12610560)

- ベルジュロ伊藤宏美 (2007) 「逐次通訳の基本プロセスの検討」『通訳研究』 No.7: 89-116.
日本通訳学会
- 水野的 (1997/2004) 「意味の理論」批判と通訳モデル 『『通訳理論研究』論集』 107-122. 日
本通訳学会